

第113回「さんか・さろん」まとめ ・2021年12月21日(火)

～「よさこい」は、全国にどう広がり、
どんな役目を果たしたか～

・川竹大輔さん

高知大学次世代地域創造センター専
門員(地域人材育成)、理事特別補佐

東京大学教養学部(文化人類学)卒業、大学4年生のときに YOSAKOI ソーラン祭り創設に関わり、知事対談フォーラムを担当。朝日新聞記者(高松支局)、津市議会議員、高知県特別職知事秘書(橋本大二郎知事)、安芸市役所助役、デジタルこうち推進協会、高知県中小企業家同友会などを経て、現職。「現在大学で席を置いているが“一人産学官民連携”と自称をしながら仕事をしている」というユニークな略歴をお持ちの川竹大輔さん。あまりにも有名なので、知っているつもりで実はきちんと知らない「よさこい」についてとことん伺いました。

.....



[よさこいの魅力
\(yosakoi-ni
ppon.jp\)より](http://yosakoi-nippon.jp)



<そもそも「よさこい」とは>

「よさこい祭り」は高知で8月9日から12日の昼から夜10時くらいまで、暑い時期に開催されている。写真のような衣装で“鳴子”をもって踊る。「地方車」(じかたっしゃ)という車が音を出して先頭を引っ張っていく。チームがそれぞれの工夫を凝



らして、曲も踊りも違うのが、阿波踊りとの大きな違いだ。

「よさこい祭り」は戦後できた。経済活性化、市民の健康を祈って1954年(昭和29年)に阿波踊りを真似して誕生、宗教色のない祭りだ。現在、高知市内の9カ所の競演場、7カ所の演舞場で約200チーム、18,000人が踊る。高知県の人口は69万人、高知市が32万人なので、町全体がカーニバルになっているようだ。

かつて武政英策さん作曲、ペギー葉山さんの歌「南国土佐を後にして」が全国的にヒットしたが、その武政さんが2週間で「よさこい鳴子踊り」創作したそうだ。武政さんは「郷土芸能は民衆の心の躍動である。誰の誰べえが作ったか分からないものが、忘れられたり、まちがったりしながら、しだいに角がとれてシンプル化していくものである。要は民衆の心に受け入れられるかどうかで問題で、よさこい鳴子踊りにして



※第一回よさこい祭りの鳴子

<自分も「よさこい」にハマって>

東京大学教養学部の文化人類学にいたときに社会調査実習で高知出身ということもあり、あらためて「よさこい」を学んだ。東京高円寺の阿波踊りが都内にぎやかに広がっているのをみて、高知のよさこい祭りもこのように広がったら良いなと思った。

「YOSAKOI ソーラン祭り」というものが札幌でできるというとき、高知出身の東京在住学生としてその創設に参加(92年)、2月に学生実行委員会に合流「街は舞台だ。日本は変わる」の、キャッチコピーなど発案。北海道・高知の両知事にきてもらい、学生とシンポジウムを行った。

全国でよさこいが広がる中で、三重県津市で「安濃津よさこい」を立ち上げる。(98年)、名古屋の「にっぽんど真ん中祭り」開始に関わる。名古屋「ど真ん中祭り」は8月下旬の土日、いま200以上のチームが踊っている。

高知に帰ってからも「よさこい」に関わり、高知大学で「よさこい概論」という授業を担当している。高知のよさこいがどうやって誕生して全国にどう広がったのかを、学生のグループワークを交えながらやっている。毎年200人くらい受講登録を行い、やっている。



<YOSAKOI ソーラン祭りの急成長>

「YOSAKOI ソーラン祭り」は、よさこい祭りを見た北大生の発案で始まった。(91年)バブルのかげりが見え始めたころにスタート。高知県北海道事務所の協力、100人規模の学生実行委員会、企業・道内メディアの協賛、高知有名チーム、両知事の出演で成功を遂げる。現在、北海道選出参議院議員の長谷川岳(はせがわがく)氏が創設者。

「YOSAKOI ソーラン祭り」誕生を描いた一冊に『街は舞台だ YOSAKOI ソーラン祭り』があり、僕も登場している。

高知のお祭りをしましょう!ではなく、「よさこい」を通じて北海道で市民が参加できるかたちを作っていきましょうという考え方。大学生たちが積極的にまちづくりに参加する、ということで支持された。高知に学び北海道で発展し、マニュアル本も発行された。「YOSAKOI ソーラン祭り」は“鳴子を持って踊ること”と“ソーラン節のフレーズをいれること”だけがきまりとなっている。



北海道はバブル崩壊後、拓殖銀行の破綻、レジャー施設の閉鎖など厳しい状況にはあったが、学生たちが作り一般の人たちがいろいろな形で参加できるというお祭りに対する共感もあり、北海道の夏の風物詩になっていった。

北海道全体で広がっていき 200 以上ある市町村のうち 160 が参加した。第一回では参加チームが 10 チームであったが毎年倍々以上に増えていき 10 年で 400 チームが参加している。北海道洞爺湖サミットの時には各首脳らの前で踊った。2016 年全国集客数ランキングでは「博多祇園山笠」「青森ねぶた祭」「さっぽろ雪まつり」「仙台七夕まつり」に次いで名古屋の「にっぽんど真ん中祭り」が全国 5 位、北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」が 6 位、高知の「よさこい祭り」が 18 位、集客難時代にわずか 20 年あまりの年で、日本を代表する祭りに成長した。

広がっていく中で、京都でも学生で「よさこい」がはじまる、スタートするところに現立憲民主党の泉健太（いずみけんた）氏も祭りを作っていくという側に立ち活躍されていた。

<広がった背景と意義>

よさこい系イベントが広がった背景・意義

- 参加型イベントのない都市
- ハコモノでないソフトの魅力
- 商店街衰退への危機感
- 高知県が広がりに応援
- 地方から地方への拡大(東京を経由しない、自由民権運動以来の文化伝播)

「よさこい」系のイベントが広がっていた背景には上記のようなことが考えられる。地方から地方へ伝わっていった意義は大きい。

1988 年瀬戸大橋の開通、1998 年高知自動車道が南国市まで開通、1998 年本四架橋神戸・鳴門ルート全通、高速道路を使って



の移動が容易になった。1992 年 YOSAKOI ソーラン、1999 年全国大会開始。九州地区では週末ごとに各地の「よさこい」系イベントにチームが移動することが恒例になる。

高速交通網の発達やネットの普及が後押し、情報が拡散され“こうやれば私たちも祭りができるんだ”と伝わっていった。

祭り全般は一般的に地域ごとに特徴を持って観客に見せる、見られるもので、それぞれの祭りが交流していく機能はなかった。それが全国にある「よさこい」系チームは踊りを披露する舞台を求めて、あるいは、「よさこい」系イベントの主催者から声がかかって、週末ごとに各地区を移動。これまでの祭りとは違う交流型となった。

<教育現場での活用>

高知市の小学校 41 校のうち 32 校で実施。全国でも、「よさこい」の教材化が進み、団体で「よさこい」を踊る学校が増えた。組体操は今、団体競技ではなかなかできない時代背景があり、沖縄の「エイサー」や山形の「花笠」、高知の「よさこい」が全国的に取り上げられている。

あまり勉強では評価されない子どもたち、学校に行きづらさを感じている子どもたちが、「よさこい」をみんなでやることを通じて自分たちそれぞれの力を発揮できる場所



を見つけて、学校へ通いやすくなった、輝ける場ができた、などあちこちで報告されている。「金八先生」というテレビドラマで荒れたクラスが文化祭で「よさこい」をやることを通じて良くなっていった物語があり語られてもいる。

中学、高校生になると、よさこいの対抗クラス合戦や創作ダンスで競い合うなどが行われている。「YOSAKOI ソーラン」では指導ドリル、教材を作り“よさこいを通じて、こんなふうに成長が期待できます”などが書かれている。2018年では高校の全国31校で部活・サークルの活動として「よさこい」を踊っている。

「よさこい」を通じて若い人たちが自分ごととして世の中にぶつかりあいながら、そこで何か経験を積んでいくための場づくりに活かされていると思う。「よさこい」は、どこでも同じことをやっているように思われるが、そういう場を与える、そういう場を作っていくなかで、輝く人たちがたくさん出ているということをお伝えしたい。

北海道で胆振地方の地震でボランティアをやった方に聞くと、ボランティア仲間の相当数が「YOSAKOI ソーラン」の経験者だったということだ。京都であれば少し和調にやってみたり、愛媛県大洲市だったら鵜飼の船に乗ってみたりと、そんな工夫をしな

がら各地で「よさこい」をやっているという人たちが、何百万人もいるという日本ができています。

<地域愛を育てる>

高知大学の「よさこい」チーム数は日本一。多様なチームのあり方、人のつながりをそれぞれに活かしながらチームが出来ている。「よさこい」を通じて地元への愛着が強くなっている。

高知大学全体として高知に残る率は25%だとすると、「よさこい」に参加している大学生たちの高知県に残る比率は40%を超えている。仕事があることで地域に残っていくのが王道ではあるが、一方で地域に対する愛着があり、またそこで人間関係を築いている。高知につなぎとめている力が働いていると実感している。仕事や業種だけではなく「高知の楽しさ」「熱中感」あるいは「仲間」ということが重要ではないかと思う。



.....

【質疑】●は感想・質問 【】内は居住地、
○は答え

●自分が自治体国際化協会（CLAIR）職員でパリにいたときのこと。2003年10月パリで“ワイン祭り”があり、日本からワイン愛好者を集めたツアーがこのお祭りに参加。そこで「よさこい」を踊った女性たちがいた。小さな子どもたちに鳴子を渡して一緒に踊り、大人気だった。

「よさこい」というのはアレンジをしてめいめいにやっていいという話、非常に分権的なやり方であって、だからこそこれだけいろいろな人に受け入れられていると思う。「よさこい」にはこのような力があるということを知り、あらためてもっと早く気が付けばよかったと思う。【東京都】
これがその時の写真。↓



●天草市牛深の「ハイヤ節」は、女性が坂の上からお尻を振って漁師を誘ったといわれている。ハイヤ節、ソーラン節、「よさこい」など、海でつながっていたのでは。【神奈川県】

○江戸時代くらいから「よさこい節」という民謡があった。高知だけでなく鹿児島や紀州、太平洋沿岸を中心にあったのは確実。

「新日本紀行」で、三重県鳥羽の島の結婚式で漁師さんが「よさこい節」を歌ってい

た。それぞれの地域で「よさこい節」というのは愛されていたのだと思う。

●「静岡おだっくい祭り」というのがある。静岡市のイベントをはじめ、藤枝、浜松などいろいろなイベントに行くとそれぞれの地域に大小様々な「よさこい」サークルがあって幕末の「ええじゃないか」がおこったのではないかと思った。



なぜこんなことが起きているのかがわからなかったが、今回、川竹さんのお話をうかがってなるほどと思った。

「よさこい祭り」がもともとはお金をもらって踊ったとのことだが、それはどういうことか？【静岡県】

○現在76歳の母が若いころ昭和40年前後、電力会社で踊った。その時はいやいや踊ったが会社側からお金をもらって踊っていたそうだ。ある意味、出してくれと言われたから出たというのが昭和29年から20年近くはあったといわれている。

●川竹さんが行政にかかわったり、大学で教えたり、いろいろな各地の「よさこい」にかかわる。川竹さんのプロフィールにある面白い生き方、人生の組み立て方は、ご自身ではどのようにとらえているのか？実はそこにとても興味を持った。【東京都】



○学生時代に「YOSAKOI ソーラン祭り」を作ることにかかわった経験が大きい。20歳前後で、自分たちに何ができるかの思いをぶつけていった。まちの人と一緒に新しいことを作っていく過程の中で、「公園を借りる」「道路を使わせてもらい踊る」となると、どうしても市役所や警察へ行かなければならない。

そこで話を聞いていくうちに、そもそも誰のものかと考える。役所は管理監督をしているが、一方でみんなのものはみんなのもの、それではどうやったらみんなで使えるように話が前に進むかを考えることがあった。そんな風に今までやってきた。

●まちは誰のものか、まちは整備された時だけがよくて、それを上手く使うというのが出来ないともちの本当のあり方ではないと思う。そういう問題意識「使えるまちにするにはどうしたらいいのか」があるのかなと共感した。【東京都】

○場を作っていく人には何となくわかるかもしれないが、踊り子に伝えるのは難しい。

●「街は舞台だ・日本が変わる」これはすごいキャッチコピーだと思った。【東京都】

○学生運動の記憶も新しかった時代であり、最初は北海道大学の中でやろうかと思ったが結局できなくて結果的にまちへ出ていった。自分たちでまちは変えられるし、まちが舞台にできると伝えたかった。変わらな

いままでいるのではなくて、変わることを是としながら進んでいけばいいと思った。

●来年春に閉校（統廃合）になる小学校での記念式典で全校の生徒 11 名がステージに上がって「よさこい」を踊り、集まっている方たちに対して“私たちは元気だよ”というメッセージを発信した。このような形での「よさこい」が定着しているなと感じた。【北海道】

○鳴子を持ってしまうと、踊りがうまい人には表現が制限されるとも聞くが、踊りがうまくない人も鳴子を持つとそれなりにうまく見える。団体でひとつのものを作っていくというのには適している。学校だと上の学年の子が下の学年の子に教えていくという交流ができる。どうしてもコンテストになりがちだが。

●「阿波踊り」とか盛岡「さんさ踊り」など、群衆が踊るときにみんな着物を着て踊っているイメージだ。「よさこい」は北海道も高知も“ヤンキー”みたいな恰好して踊っているのが印象強い。【東京都】



○“ヤンキー”が入れるお祭りです。「ねぶた」だと“跳人”に入れられない人たちが騒ぐという問題があった、「よさこい」にはそうした暴走族に近いような人たち、ともすれば世の中を逸脱する人までも抱え込む力がある。

●「よさこい」のアレンジで、ここだけは守らなければいけないというところ、基本

のルールは？【東京都】

○高知だと、「よさこい節を使う」「鳴子をもつ」「前に進む」。「よさこい」系イベントの多くでは、「地元の民謡を使ってください」など。北海道で言えば「ソーラン節を入れる」決まりがある。

鳴子を持ちましょうということは決めているが、ポケットにいれっぱなしのチームもある。なかには鳴子を持たなくても参加できる、というところが出てきていて、「よさこい」関係者の中では議論がある。一方で「今日は一日よさこいやるぞ!」と言っている人を、「あなた達よさこいじゃないよ」と排除するのはどうか、という悩ましい話もある。“鳴子の魅力”をお伝えしていかなければいけないと思っている。



●振り是谁が考えているのか、きまりはあるのか、全く自由でいいのか。【東京都】

○振りは自由。振付師がプロとしてやっている。一般的に「よさこい」の正調とされている踊り、ソーラン節を使いながらの標準な振りなどするチームもある。人数は制限がある、高知だったら150人以内、最低人数は決めている。

●地域でやっているのは素晴らしいと思う。

高齢者は仲間入りされている？【東京都】

○チーム名「ばばあよさこい」などというという「YOSAKOI ソーラン」のチームもある。

高知市役所などのチームは昭和29年来の踊り。表参道や池袋でもやっているのを見てほしい。

●2000年ごろ札幌に勤務していた。「YOSAKOI ソーラン祭り」があった。北海道は梅雨がないし冬の寒さから解き放たれたその季節に、大学生が中心の踊りがあるというのがすごく開放感あり良い印象だった。

【神奈川県】

○冬の間チームで曲を作り、振りを作り練習している、6月に発表、高知とは違った良いサイクルで良いテイストだ。

●伊豆稲取で「おちやのこさいさい」というチームがあったが、10年区切りでやめてしまった。今日のお話を聞いて、やめたことを復活できるように若い子たちと作り上げていきたい。継続していきたいと思った。

【静岡県】

.....
(まとめ作業：事務局 小松崎いずみ、野口智子)



※川竹大輔著 『よさこいはなぜ全国に広がったのか』

リーブル出版